



## ○鑑賞Ⅱ

つづきです。授業を参観する前に自宅で指導案を読みながら、「自分だったらどんな授業内容を構想するだろうか。」と想像してみました。中学校1年生にとって初めての美術鑑賞の時間です。まず、この時期の生徒たちにふさわしいものはと考えます。次に世界中にあるあらゆる時代の膨大な美術作品の中から何を教材として取り上げるかということにも悩みます。絵画か彫刻かなどということもあります。日本人ですから自国のものを選択するか、または外国の作品にするかということもあります。外国と言っても欧州、米国、アフリカ、アジア、中近東、オセアニア…これも膨大な選択肢となります。ただ、日本人にとって「印象派」の絵画作品は比較的身近な存在であるとは言えるでしょう。(これはこれまでの美術教育がそうさせている面もあります。)浮世絵の版画などが印象派の画家たちに影響を与えたというエピソードも作品を身近に感じさせてくれる要因の一つです。実際の研究授業でもやはり印象派時代の絵画が中心となっていました。

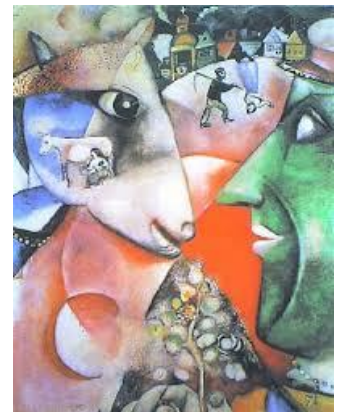
さて、私たちは印象派とそれに近い時代の絵画作品または作家の名前をどれくらい挙げられるでしょうか?中学生たちは全員が美術家または美術評論家などの関係者になるわけではありません。現実にはその学校に一人いるかまたは全くいないかぐらいの確率かもしれません。これからありとあらゆる道に進んでいく中学生たちに美術の授業で身につけておいてほしい力は何でしょう?作家の名前や作品名をどれくらい覚えているかというのはそれほど重要なことではありません。

本校はITビジネス学科とこども学科があります。情報系と保育系の就職をめざしています。情報系に進む学生にも身につけてほしい鑑賞の能力があります。保育系では「子どもと造形」という授業があり、図工で描いたり作ったりする場面もありますが、美術作品の鑑賞能力はなぜ必要なのでしょう?ここではあえて回答を準備しません。学生一人ひとりがそれぞれ考えてほしいと思うからです。

専門学校という進路先の目標がほぼ同じ学生たちにはお互いが考えやすい課題かもしれません。中学生にはどんな力を身につけさせたいかとなると簡単には回答が出てこないかもしれません。「正解はない」のではなく、たくさんあると思います。あえて私の個人的な意見を二つだけ紹介するなら「美しいものに会って美しいと感じる心」と「人間(自然)愛」です。鑑賞の授業をするとしたら美術作品を通じて、どんなさまざまな進路に進んでいく中学生でも共通に身につけてほしいと私は思います。

さて、少し話題を変えます。先日朝日新聞の「折々のことば」に記載されていたものを紹介します。「顔は覚えていないが、この子の服は毎日私が洗濯していたものだ。」私の記憶ですから、文面が少し違うかもしれませんが。このお母さんは我が子の顔を覚えていないのだそうです。顔は喜怒哀楽を表現するに過ぎないというような認識だ、というように説明がなされていました。主に西欧の美術の世界では「自画像」というモチーフがありますが、文化や民族によって認識の違いがこんなにもあるのだとビックリしました。当然どちらの文化も尊重されなければならないと思います。

美術の授業で鑑賞を設定するとき悩まなければならないことが一つ増えました。しかし、私の視点は一つ拡がりました。



「私と村」：マルク・シャガール  
授業で取り上げられていました。